
体育教師論における身体・文化・言語 ：メルロ＝ポンティを手掛かりに

坂本 拓弥

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科

Body, Culture and Language in the argument on PE teacher ：Discussion on Merleau-Ponty's philosophy

Takuya SAKAMOTO

Doctoral Course, The United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

Abstract

The purpose of this paper is to show the necessity of discussing culture and language for PE teacher based on Maurice Merleau-Ponty's philosophy of the human body, especially *Phénoménologie de la perception*. For this purpose, previous studies on PE teacher are critically surveyed to indicate the necessity of qualitative aspect of PE class and the significance of the idea of "lived world" in *Phénoménologie de la perception*.

The main points for discussion are as follows:

- (1) Human body has a layered structure consisting of "habitual body (corps habituel)" and "actual body (corps actuel)", and also has a specific function, i.e. "body schema (schéma corporel)".
- (2) Perspective on the body schema is an essential to clarify the formation process of body culture which has been considered from the viewpoint of "habitus" so far.
- (3) PE teacher's language is to be considered as "parole" similar to body gesture.

To conclude, body, culture, and language should be considered as a mutual relationship in the discussion of PE teacher. This perspective would present a new *raison d'être* of PE.

I. はじめに：体育教師論の課題

本稿の目的は、体育教師論における身体、文化、及び言語を改めて検討し、それらの関係を捉え直すことによって、体育教師の文化と言語を身体論として論じる必要性を提示することである。これは、今後体育教師の身体論を構築していくための基礎的考察であり、その身体論の全体像を素描するものである。体育教師に関わる文化と言語は従来個別に論じられてきた。つまり、文化について

はある集団における伝承過程が検討され、また言語については記録された言語の分類と分析が試みられてきたといえる。しかしそこには、実際に一人の体育教師がある文化をどのように身に付け、またその教師が発する個々の言葉にはどのような意味があるのかという、より実質的な視点が見逃されてきたという課題がある。そのため、本稿は、現象学的身体論の視点から、体育教師特有の文化性、すなわち、しぐさや身振り、及び彼らのパロ

ールとしての指導言語を捉え直すことで、この課題の解決への手掛かりを得ようとするものである。

この目的を達成するために、モーリス・メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）の『知覚の現象学 *Phénoménologie de la perception*』¹⁾に基づいて考察を進める。後に詳述するように、本著作は、われわれの知覚を科学的認識の基盤と位置づけ、その重要性を論じたものである。従って、実証的な研究が主流となりつつある体育教師論において、彼の論点は新たな可能性を提示することが期待される。

まず予備的考察として、体育教師論の現状を批判的に検討し、その課題を簡潔に示したい²⁾。これまで体育教師論においては、体育教師に求められる資質や能力が様々に論じられてきた³⁾。特に最近では、授業場面で求められる指導技術に関する論議が盛んになされている⁴⁾。そこでは、指導言語や教材等の有効性が児童・生徒の授業評価との相関によって検討されており、方法としては主に実証（科学）的な数値的分析が用いられている⁵⁾。それらは、授業研究に客観的な指標を確立する試みであり、一定の評価を与えることができる。

しかし、授業における教師と児童・生徒との関係を、そのような数値的分析によって因果関係として捉えることについては、批判もなされている⁶⁾。その要点は、数値による実証的分析は、教師と児童・生徒との関係を単線的な因果関係として捉えることで、現実の授業が複雑な関係によって成り立っていることを見逃している、という現状に対する批判である⁷⁾。また、そのように客観化された指導技術が重視されることによって、多くの教師が標準化された指導技術を用いるようになると考えられる。これは便利な反面、個々の教師が自らの存在意義を実感することを困難にし、結果として、教師の実存的な危機を招来することが指摘されている⁸⁾。

このように、今日の体育教師論においては、教師と児童・生徒との関係が単純化されたモデルとして提示される傾向にあり、その根底にある根源的で複雑な関係が軽視されている⁹⁾。この根源的

な関係は、実証的に捉えられた世界（客観的世界）をその基盤として支える、教師と児童・生徒との「生きられた世界 *monde vécu*」¹⁰⁾における関係である。そして、この「生きられた世界」の重要性が深く論じられているのが、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』である。

メルロ＝ポンティは、学位請求の主論文である『知覚の現象学』（1945）と副論文である『行動の構造 *La Structure du Comportement*』（1942）をはじめとして、多くの哲学、特に現象学的著作を著している¹¹⁾。初期の主著である『知覚の現象学』においては、「知覚」を現象学的視点から主題的に論じ、従来の主観と客観、心と体という二元論的思考の克服を目指しており、その中で、「生きられた世界」及びそこにおける身体についての詳細な議論を展開している。

彼は、上記の目的を達成するために哲学に課せられた課題を、次のように表している。すなわち、「最初の哲学的行為 *Le premier acte philosophique* は、客観的世界 *monde objectif* の手前にある生きられた世界にまで立ち戻ることだ」¹²⁾ というのである。そしてその理由を、「この生きられた世界においてこそ、われわれは客観的世界の権利 *le droit* もその諸限界 *les limites* も、了解することができる」¹³⁾ からであるとしている。この「生きられた世界」について、長滝祥司は、それが「始源的な知覚世界を表現する概念であり、近代科学が構築した科学的世界像の基底にあって、それを基礎づけるという役割を担う」¹⁴⁾ のものであると述べている。このように、「生きられた世界」は、身体的存在である人間が有する知覚という根源的な働きが担っている世界なのである¹⁵⁾。

知覚は、一般的に見ることや聞くことと同義として捉えられており、それはわれわれの意識的な行為であると理解されている。しかし、松葉祥一によれば、「メルロ＝ポンティが注目したのは、むしろ『目の端でとらえる』ことや『何となく聞く』ことなど、いわば前意識的な知覚」¹⁶⁾ なのである。この前意識的な知覚とは、意識の対象（図）を成立させるために必要な背景（地）を捉えることで

ある。松葉が述べるように、「こうした知覚があることによって、…中略…（われわれは）習慣的行動をとることができる。」¹⁷⁾（括弧内引用者）のである。換言すれば、われわれはこのような前意識的な知覚によって、身体として外界の物や他者と関わっているものであり、それは通常、暗黙裡に行われているといえる¹⁸⁾。

以上が、『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの「生きられた世界」及び身体に関する主張の概略である。そしてそれは、哲学において「知覚と身体役割」の重要性を示し、「哲学に大きな変革をもたらした」とされる¹⁹⁾。すなわち、「前意識的な知覚が人間の意識活動の基盤にあること、また身体がこうした知覚の主体としての役割を果たしていること」²⁰⁾を明らかにした点が、メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』が持つ独創性といえよう。もちろん、本著作は彼の哲学を集約するものではないが²¹⁾、「生きられた世界」という視点は、体育授業を根本的に捉え直し、体育教師の身体、文化、及び言語を再考する有効な視点になると考えられる。従って次に、これらを再考するための基盤となる身体論について、『知覚の現象学』の記述を参照して考察を進めていきたい。

II. 身体：習慣的身体と身体図式

メルロ＝ポンティは身体を様々な定義しているが、その一つに、「身体 *le corps* とは、世界のなかへのわれわれの投錨 *notre ancrage dans un monde* のことなのである。」²²⁾ というものがある。これは、人間の身体の特異な存在様態を表すものであるといえる。彼はこのことを典型的に示す例として「幻影肢 *membre (jambe/bras) fantôme*」²³⁾を挙げ、それによって、生理学的にも心理学的にも捉えきれないわれわれの身体の側面を明らかにしている。

幻影肢とは、腕や脚を切断した後、物理的には存在しないその腕や脚に痛みを感じる現象である。メルロ＝ポンティはこれを詳細に検討しているが、その要点は以下の通りである²⁴⁾。従来、この現象の原因は様々な論じられており、生理学者によって「末梢説」や「中枢説」が、また心理学

者によって「心理学的説明」がそれぞれ提出され、その後、幻影肢は生理的条件と心理的条件とが互いに絡み合っているのだという「混合理論」が持ち出されるのであるが、これこそは、心と体の二元論によって説明が困難に陥るものであった。それゆえ、メルロ＝ポンティは、『『心的なもの』と『生理的なもの』、『対自』と『即自』といったデカルト的二分法を乗り越え、それらが、接合する地盤を求めようとする』²⁵⁾ことになるのである。

メルロ＝ポンティはここで、「習慣的身体 *corps habituel*」と「現勢的身体 *corps actuel*」という身体の中の二つの層を提示することで、幻影肢の説明を試みている²⁶⁾。すなわち、幻影肢とは、現勢的身体としては既に消失している手が、習慣的身体の層において依然として現れている現象である、というのである²⁷⁾。この習慣的身体とは、自らの身体に特別な意識を向けることのない習慣的な行動を可能とする。例えば、われわれは考え事をしながら目的地まで歩いていくことができるし、また、読んでいる原稿から目を離さずにコーヒークップを手にも取ることもできる。このように、われわれの生活において習慣的身体は重要な役割を担っているにもかかわらず、通常われわれは目に見える現勢の身体のみを身体と捉える傾向にあり、その結果、日常において習慣的身体の層が意識されることはほとんどないのである。

メルロ＝ポンティは、この習慣的身体の働きとして「身体図式 *schéma corporel*」を挙げる²⁸⁾。彼はその典型例として、自動車で細い道を通る際に思わず身を縮めることや、杖によって身体感覚が拡張すること等を指摘している²⁹⁾。また、われわれが身体のある部位にかゆみを感じた場合、それを視覚的に、もしくは定量的に確認することなく、当該箇所を手を持っていくことができるのも、まさに習慣的身体のレベルにおける身体図式があつてこそなのである。

以上のような習慣的身体や身体図式という視点では、われわれの身体が単なる物体として存在しているだけではなく、むしろ身体それ自身が、物や他者といった世界との関係を保持しているというこ

とを示している。だからこそ、「身体とは、世界をもつためのわれわれの一般的な手段 *notre moyen général* である。」³⁰⁾とメルロ＝ポンティは述べたのである。これについて、加賀野井秀一は以下のように述べている。「身体図式もしくは『身体』は、『私』が意識的に世界との関係を取り結ぶはるか以前から、世界に投錨し、世界に住み着き、世界を世界たらしめつつ、すでに決定的な形で世界と関わってしまっている」³¹⁾のである。

ここまで、『知覚の現象学』における「生きられた世界」及びそこにおける知覚に関するメルロ＝ポンティの記述を参照し、本節の主題である身体についての検討を進めてきた。彼の身体論に従うならば、体育教師の身体もまた同様の構造を有するといえるであろう。つまり、その身体は体育授業という世界を身体図式によって秩序づけているのである。換言すれば、体育授業において体育教師は、自らの身体によって様々の文化を獲得していると考えられる。従って次に、体育教師に関わる文化についての検討していく。

Ⅲ. 文化：身体による習慣の獲得

一般に文化という用語は、人為的所産全般を広く指している。従って、ここではわれわれの身体に直接的に関わるもの、すなわち身体文化に限定して考察を進めたい。体育教師の身体文化を検討するために、まず、児童・生徒が体育教師に対して持つイメージを確認する。なぜなら、このイメージ（体育教師像）は、体育教師の日常の言動（しぐさや身振り等）、すなわち身体文化に基づいて形成されていると考えられるからである。例えば先行研究においては、「丈夫で、精神力があり、…中略…授業では運動の楽しさなどの情意面に焦点を置いて計画的かつ熱心に指導する人であるが、信頼感に欠け、生活指導面での厳しい怖い存在である」³²⁾という体育教師像が描かれている。このような他教科の教師に対するそれとは大きく異なる「体育教師らしさ」のイメージには、体育教師に特有の身体文化が反映していると考えられる。

ここでは、このような身体文化の獲得に関する

特徴を把握するために、従来の体育教師の身体文化論において鍵概念とされてきた「ハビトゥス *habitus*」³³⁾を検討したい。ハビトゥスの代表的論者であるピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu, 1930-2002）は、ハビトゥスを「身体によって学ばれるもの *Ce qui est appris par corps*」³⁴⁾と呼び、それが「意識や表出の手前 *deçà de la conscience et de l'expression*」³⁵⁾、すなわち無自覚的な状態において獲得されるものであると指摘している。つまり、文化の獲得が身体レベルで生起するということである。そしてここから、ブルデューの指摘する身体とメルロ＝ポンティのいう習慣的身体とが、同様の働きを示していることがわかるであろう。従って、ハビトゥスに代表される身体文化の獲得についても、メルロ＝ポンティのいう習慣的身体の視点からの検討は有効と考えられるのである。

これについて、メルロ＝ポンティは端的に、「習慣の獲得 *L'acquisition de l'habitude* とは身体図式の組み換え *remaniement* であり更新 *renouvellement* である」³⁶⁾と述べている。つまり、自らの身体図式を組み換え、自らの世界を新たに獲得していくことが、習慣、すなわちある文化を獲得することなのである。そして、「習慣は思惟 *la pensée* のなかにも客観的身体 *le corps objectif* のなかにも宿るものではなく、世界の媒体としての身体 *le corps comme médiateur d'un monde* のなかにも宿る」³⁷⁾とメルロ＝ポンティが述べる時、ここでもやはり、習慣的身体の重要性が強調されている。彼は、さらに次のような例を挙げる。すなわち、ある「色が見られるようになる」とは、視覚の或る様式 *un certain style de vision*、自己の身体 *corps propre* の新しい使用法 *un nouvel usage* を獲得することであり、身体図式を豊かにし *enrichir* 再組織する *réorganiser* ことである。³⁸⁾ 確かに、色の知覚が民族によって異なることは、既に広く知られており、それは人体の解剖学的視点からは説明することのできない事象である³⁹⁾。だからこそ、身体及び身体図式という視点が重要になってくるといえる。そして、ここから示唆されることは、ある身体文化の獲得が知覚的経験を通した身体図式の

組み換えによってなされる一方で、その知覚は既に獲得されている身体文化から影響を受けるといふ、一種の循環的な関係である⁴⁰⁾。従って、体育教師の身体と文化の関係は、このように知覚に着目することで、その獲得と変容を捉えることが可能となるのである。

体育教師は児童・生徒や同僚の教師と関わる中で、自己の身体図式の組み換えや更新を行い、それによって特有のしぐさや身振りを体得している。そして、実際の体育授業において特に重要な事柄は、このような体育教師の身体及び身体文化が、児童・生徒との関係の中でどのような働きを有するのかという点にある。換言すれば、体育教師の身体及び身体文化が、児童・生徒の学習にどのように影響しているのかを検討する必要があるということである。これを明らかにすることは、従来の体育教師論において議論されてきた、求められる体育教師像の確立等の課題に対して、新たな視点を与えるであろう。

このことに関連して、われわれが他者と関わる際に重要な役割を担う文化について、メルロ＝ポンティは次のように述べている。「特に、他者知覚 *la perception d'autrui* において本質的役割 *un rôle essentiel* を演ずることになる文化的対象 *un objet culturel* があるが、それが言語 *le langage*」⁴¹⁾なのである。従って次に、体育教師が指導の際に用いる言語、すなわち「指導言語」を、体育教師に関わる文化のー典型として検討する。「指導言語」を用いない体育授業は想定できず、それを論じることが体育教師論に不可欠であることはいうまでもない。しかしそれだけでなく、われわれはメルロ＝ポンティの言語論を参照することで、これまで述べてきた身体との関係の中でこそ個々の体育教師の発する言葉の働きを明らかにしうる、という新たな視点を獲得することができるのである。

IV. 言語：所作としてのパロール

体育教師の「指導言語」に関する先行研究としては、主に量的方法による分類・分析が挙げられ、これらは体育授業の充実と改善を試みるものであ

るといえる⁴²⁾。しかし、それらの研究において今一度省みられるべきは、分析対象となっている「指導言語」とは一体如何なるものなのかという点であろう。先行研究においては、それが数量化された客体として扱われている。しかし、一つひとつの出来事についてその都度立ち止まって考えることのできない授業場面では、体育教師の言葉はその個々の状況において固有の機能を発揮しているのであり、従って、従来の研究はこの点を見落としているといえる。

メルロ＝ポンティが論じる言語論の特徴は、端的にいつて、それを「所作 *geste*」⁴³⁾、すなわち身振りやしぐさの延長として捉えたことにある。それは、言語を記号と見なす伝統的な思考法とは全く異なったものであり、だからこそ彼は、個々のパロール、すなわち「言葉 *la parole*」⁴⁴⁾の重要性を強調するのである。彼によれば、パロールには「語る言葉 *parole parlante*」と「語られた言葉 *parole parlée*」の区別を立てることができる⁴⁵⁾。彼は、特に前者の「語る言葉」の重要性を指摘しながら、「言葉とは思惟の〈標識〉 *le « signe » de la pensée* ではない。」⁴⁶⁾と述べる。換言すれば、頭の中で考え、構成されたものを言葉に置き換えることがパロールの本質ではないというのである。その例として、彼は次のように述べている。すなわち、「弁士は語る前に思惟するものではないし、それどころか、語っているあいだにも思惟しはしない。すなわち、彼の言葉 *sa parole* が彼の思惟 *sa pensée* なのだ。」⁴⁷⁾このことは、われわれが人と夢中になって話しているときに、語や文を頭の中に一度思い浮かべ、整理してからそれらを発しているわけではないことから明らかである。このような例からもわかるように、パロールはわれわれが状況に合わせて無意図的に行っている、しぐさや身振りと同様の行為として捉えられるのであり、だからこそメルロ＝ポンティは、「言葉とは一つの所作 *un geste*」⁴⁸⁾であると主張したのである。

メルロ＝ポンティはさらに、通常全く異質なものと考えられている身体的所作と言葉の、その「意味作用 *signification*」⁴⁹⁾という共通する働きを指摘

している。彼によれば、「言語的所作 *Le geste linguistique* も他のすべての所作とおなじく、おのれみずからその意味を描き出している *dessine lui-même son sens*。」⁵⁰⁾のである。そして、「この力によってこそ、人間は己れの身体と言葉とをつうじて、あらたな行動へと、あるいは他者へと、あるいは己れ自身の思惟へと自己を超越する」⁵¹⁾ことができるのである。換言すれば、身体的存在としてのわれわれ人間は、身体文化と言葉を通じて他者と関わり、さらにはそれらの持つ意味作用という力によって、他者との新たな関係とその意味を作り出していくことができるということになる。『対話の経験 *l'expérience du dialogue* においては、他者と私とのあいだに共通の地盤 *un terrain commun* が構成され、私の考えと他者の考えとがただ一つと同じ織物 *un seul tissu* を織り上げるのだし、私の言葉も相手の言葉も討議の状態 *l'état de la discussion* によって引き出されるのであって、それらの言葉は、われわれのどちらが創始者だというわけでもない共同作業 *une opération commune* のうちに組みこまれていく」⁵²⁾と彼が述べる時、ここから示唆されることは、体育教師のパロールが単なるメッセージの伝達ではないということである。従って、パロールを重視することの本質的な意義は、それがすでに固定された語の意味を伝達することではなく、体育教師と児童・生徒、人間と人間が関わりあう中で、新たな関係を作り出すことができる点にあるといえよう。体育教師と児童・生徒との間に、互いに予想もしなかった新たな展開が生まれるのは、パロールのこのような働きがあってこそなのである。

以上のことから、体育教師の指導言語の、このようなパロールとしての側面を明らかにする必要性が理解できよう。メルロ＝ポンティの言語論においては、ラングよりもパロールが重視され、そのパロールは身体的所作の延長として捉えられた。従って、体育教師のパロールもまた、その体育教師の身体的所作の延長として捉えられるべきものである。彼が述べるように、そのパロールの意味生成は、「あたかも、われわれの身体が習慣の

獲得 *l'acquisition de l'habitude* に際して、突如一つのあたらしい所作 *un geste nouveau* に適合するようになるのに似て」⁵³⁾ いるのである。もちろん、この延長や類似という在り方は、今後より詳細な検討を要するものである。しかし少なくとも、このように体育教師の指導言語をパロールとして捉え直し、その重要性を示すことは、今日の体育教師論に見られる指導言語の扱われ方の限界を克服する可能性を有するであろう。従来のように、指導言語を記録し、それを詳細に分類することは、最終的に指導言語の目録をつくることに終始する危険性がある。そのような事態を避けるためには、個々の体育教師が発するパロールの働きを検討していくことが必要となるのである。

V. まとめ

メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』を手掛かりとして考察してきたように、体育教師論における身体、文化、及び言語は、それぞれを個別に論じうるものではなく、むしろそれぞれの関係の中で、はじめて、体育教師論におけるその位置づけを明らかにすることができるといえる。つまり、身体を知覚する主体と捉え、そこから体育授業における教師を身体的存在として捉え直すことが重要となるのである。

身体は、通常意識されない習慣的身体という層を有しており、この層の働きによってこそ、われわれの習慣的な行動が可能となっている。そして、ある習慣を獲得することとは、ある身体文化を獲得することであり、それは知覚による身体図式の組み換えと更新として捉えられることが明らかとなった。つまり、「体育教師らしさ」といわれるようなしぐさや身振りは、体育授業等の様々な環境の中で形成されていくもののなのであり、従ってその獲得の過程を明らかにするためには、体育教師の知覚及び身体図式という視点からのさらなる検討が必要となる。そして、体育教師に欠かすことのできない指導言語は、それを身体的所作の延長と捉えうることが示された。これによって、体育教師論における新たな位置づけ、すなわち指導言

語に関する今後の議論の新たな方向性が示されたといえよう。

注及び引用・参考文献

- 1) メルロ＝ポンティ,M. (竹内芳郎他訳) : 知覚の現象学Ⅰ, みすず書房, 1967. ; 同 (竹内芳郎他訳) : 知覚の現象学Ⅱ, みすず書房, 1974.
(Merleau-Ponty, M. : *Phénoménologie de la perception*, Editions Gallimard, Paris, 1945.)
- 2) 本稿で展開される体育教師論の批判的検討については, 以下の論考を参照されたい. 坂本拓弥 : 体育教師論の批判的検討 - 体育教師の身体論に向けて -, 体育・スポーツ哲学研究 34(1), 23-36, 2012.
- 3) 中井隆司は, 体育教師に求められる資質について, これまで「数多くの研究者が多様な視点から雑誌や論文に私見を述べて」きたことを指摘している. 中井隆司 : 「第 9 章体育教師論」, 竹田清彦他 (編), 体育科教育学の探求 - 体育授業づくりの基礎理論 -, 大修館書店, 386, 1997.
- 4) 木原成一郎他 : 第 2 次世界大戦後の日本において保健体育教師に求められてきた専門的力量, 学校教育実践学研究 11, 51-62, 2005. 参照.
- 5) 木原成一郎他 : 上掲書. ; 高橋健夫 (編) : 体育授業を観察評価する, 明和出版, 2003. 参照.
- 6) 佐藤学 : 『『パンドラの箱』を開く - 『授業研究』批判 -, 教師というアポリア - 反省的实践へ -, 世織書房, 25-56, 1997. 参照.
- 7) 佐藤学 : 上掲書. 参照.
- 8) これに関連して, 佐藤は次のように述べている. 「最近, 比較的若い教師から数多くの相談を受けるのは, 日々精いっぱい働きながらも心の奥に広がるのっぺりとした空虚な感覚に対するおびえであり, 教師としてもっとも大切な何ものかを喪失していることに対する恐怖の感情である.」佐藤学 : 上掲書, 401.
- 9) 坂本拓弥 : 前掲書. 参照.
- 10) メルロ＝ポンティ,M. (1967) : 前掲書, 110.
(Merleau-Ponty, M. : op.cit.,83.)
- 11) 彼の著作や遺稿集, 及び講義録の目録につい

ては, 木田が広範な文献表を作成している. 木田元 : メルロ＝ポンティの思想, 岩波書店, 411-430, 1984. 参照.

- 12) メルロ＝ポンティ,M. (1967) : 前掲書, 110.
(Merleau-Ponty, M. : op.cit.,83.)
- 13) メルロ＝ポンティ,M. : 上掲書, 110.
(ibid.,83-84.)
- 14) 長滝祥司 : 知覚とことば - 現象学とエコロジカル・リアリズムへの誘い -, ナカニシヤ出版, 39, 1999.
- 15) 現象学における知覚の根源性については, 以下を参照されたい. 村田純一 : 「知覚」, 木田元他 (編), 現象学事典, 弘文堂, 318, 1994.
- 16) 松葉祥一 : 「メルロ＝ポンティのアクチュアリティ」, 河出書房新社 (編), メルロ＝ポンティ, 河出書房新社, 90, 2010.
- 17) 松葉祥一 : 上掲書, 91.
- 18) これは, マイケル・ポランニーが所謂「暗黙知」について言及するように, 「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる.」ということを示しており, そしてそれは, 身体における知を示唆している. ポランニー,M. (高橋勇夫訳) : 暗黙知の次元, 筑摩書房, 18, 2003.
- 19) 松葉祥一 : 前掲書, 91.
- 20) 松葉祥一 : 上掲書, 91.
- 21) ティリエットによれば, メルロ＝ポンティ哲学は前期・中期・後期の三期に大別することが可能であり, それぞれを特徴づけることができるという. ティリエット,X. (木田元他訳) : メルロ＝ポンティ, 大修館書店, 1973. 参照.
- 22) メルロ＝ポンティ,M. (1967) : 前掲書, 242.
(Merleau-Ponty, M. : op.cit.,180.)
- 23) メルロ＝ポンティ,M. (1967) : 上掲書, 138.
(Merleau-Ponty, M. : Ibid.,104.)
- 24) 幻影肢に関する記述は, 以下を参照されたい. メルロ＝ポンティ,M. (1967) : 上掲書, 138-140.
(Merleau-Ponty, M. : Ibid.,105-106.)
- 25) 木田元 : 前掲書, 121.
- 26) メルロ＝ポンティ,M. (1967) : 前掲書, 148.
(Merleau-Ponty, M. : op.cit.,111.)

- 27) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 148-149. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,111.)
- 28) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 172. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,127.) なお、『知覚の現象学』の訳者である竹内芳郎と小木貞孝は、訳注の中で、身体図式という用語を初めて用いたのはヘンリー・ヘッドであると述べている。メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 340.
- 29) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 241. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,178-179.)
- 30) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 245. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,182.)
- 31) 加賀野井秀一:メルロ＝ポンティ - 触発する思想(哲学を読む 8) -, 白水社, 134, 2009.
- 32) 中井隆司他:体育教師のイメージに関する研究 - 特に、大学生の中学・高校時代の体育教師に対する回顧的分析を通して -, スポーツ教育学研究 16(2), 133, 1996.
- 33) ブルデュー,P.(今村仁司・港道隆訳):実践感覚 1, みすず書房, 83, 1988. (Bourdieu, P.: *Le sens pratique*, Les Editions de Minuit, Paris, 88, 1980.)
- 34) ブルデュー,P.:上掲書, 117-118. (Bourdieu, P.: Ibid.,123.)
- 35) ブルデュー,P.:上掲書, 117. (Bourdieu, P.: Ibid.,123.)
- 36) メルロ＝ポンティ,M.(1967):前掲書, 239. (Merleau-Ponty, M.: op.cit.,177.)
- 37) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 243. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,180.)
- 38) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 255. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,190.)
- 39) 例えば、以下を参照されたい。今井むつみ:ことばと思考, 岩波書店, 2010.
- 40) この循環的な関係については、今後より詳細な検討が必要であると考えている。その手掛かりとしては、長滝祥司の以下の論考が挙げられる。長滝祥司:前掲書, 1999.
- 41) メルロ＝ポンティ,M.(1974):前掲書, 218. (Merleau-Ponty, M.: op.cit.,412.)
- 42) このような研究については、以下を参照されたい。高橋健夫(編):前掲書, 2003.
- 43) メルロ＝ポンティ,M.(1967):前掲書, 301. (Merleau-Ponty, M.: op.cit.,224.)
- 44) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 286. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,213.)
- 45) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 321. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,238.) メルロ＝ポンティによれば、「語る言葉」が「意味的な意図 l'intention significative が発生状態で見出せるような言葉」であるのに対して、「語られた言葉」は「手もちの諸意味をあたかも既得の財産 une fortune acuisse でもあるかのように享受する。」ものである。メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 321-322. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,238-239.) なお、この二つの言葉の関係について、訳者の竹内芳郎と小木貞孝は訳注の中で、それがソーシャル言語学におけるパロールとラングの関係に対応すると述べている。メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 347-348. しかし、この解釈については否定的な指摘もなされており、未だ検討の余地が残されているといえよう。批判的な見解としては、以下を参照されたい。加賀野井秀一:前掲書, 189-190.
- 46) メルロ＝ポンティ,M.(1967):前掲書, 298. (Merleau-Ponty, M.: op.cit.,221.)
- 47) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 295-296. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,219.)
- 48) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 302. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,224.)
- 49) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 286. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,213.)
- 50) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 305. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,226.)
- 51) メルロ＝ポンティ,M.(1967):上掲書, 317-318. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,236.)
- 52) メルロ＝ポンティ,M.(1974):前掲書, 219. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,412.)
- 53) メルロ＝ポンティ,M.(1967):前掲書, 301. (Merleau-Ponty, M.: Ibid.,223.)